

令和元年度ライチョウ野生復帰検討ワーキンググループ議事概要

開催日時：令和2年1月31日（金）9:00～12:30

開催場所：自然環境研究センター7階 第2会議室

（座長：中村 浩志 信州大学 名誉教授）

議事次第

1. 開会

2. 議事

- （1）令和2年度におけるライチョウ復活事業について（中央アルプス）
- （2）第二期ライチョウ保護増殖事業実施計画案（作成中）の概要について
- （3）ライチョウ野生復帰手法の検討について

3. 閉会

議事1 令和2年度におけるライチョウ復活事業について（中央アルプス）

<飼育卵の野生復帰及び家族の移植の計画案について>

- 駒ヶ岳周辺のなわばり分布可能数調査や植生調査から、生息環境や食草が維持されていると判断している。ただ、現状ではなわばり分布可能域の全山岳の植生を調べきれていないので、調査をさらに進めて環境収容力を評価する。
- 乗鞍岳の個体群の負荷と事業実施の現実性から3家族約20羽とした。過去の放鳥事例から10羽では少ないと考えられる。
- 8卵の移植を想定しているが、孵化率や生理学的なことを考えると、産卵条件の異なるできるだけ多数の卵を移植して成績をみたほうが良い。昨年この雌は8卵を産卵したので過去最多の一腹卵数である8卵での野生復帰は妥当と考える。移植後の数のほうが雌の産卵数より多くなる可能性もあるが、8卵程度であれば多すぎて放棄するということはないと考えられる。
- 平年に比べて高い気温がどのように影響するか気付きである。他の鳥類では1か月ほど早く繁殖行動が見られているものもある。低温期間が短いために卵が小型化する可能性がある。
- 動物園から提供できる卵は1園あたり4卵程度である。産卵期のピークの状況次第であるため、1,2卵しか採卵できないこともあるかもしれない。生息域外の遺伝的多様性保持のためにも、1園あたりの採卵数は少ないほうが良い。5卵未満になることは避けたいので、飼育下で得られる卵が4卵以下であった場合は無精卵を残して5卵以上になるようにする。遺伝的多様性の問題もあるが、動物園側としては飼育卵が少なくても野生復帰を実行したい。
- 飼育卵は中央アルプスの麓に移送してからも貯卵するので飼育園館における貯卵期間の目安は10日程度になる。

<飼育卵の野生復帰における想定について>

- 中央アルプスのメスの産卵が早かった場合、動物園で産卵を早めるライトコントロー

ルの調節は可能であるが今からだと鳥体に負担がかかるので好ましくない。早期に産む個体もあるので、中央アルプスのメスの産卵が早かったとしても飼育卵の提供は可能だと考える。

<ケージ保護中の餌について>

- ケージ保護において複数の家族に様々な餌を給餌する機会があるなら、ウサギ用ペレットの給餌を試してもらいたい。将来的にはライチョウが現地で食べている植物を栽培して給餌すべきであり、実現可能である。高山にある植物と同じ科の低山の植物を与えていいかどうかは試験してみないとわからない。

<その他>

- 捕食者対策について、自立できる程度に個体群が拡大した後は捕食者対策を縮小・終了することを考えるのが良い。捕食者対策は、野生個体群創出の初期段階においてリスクを取り除くために講じる対策の一事業である。

議事2 第二期ライチョウ保護増殖事業実施計画案（作成中）の概要について

- 質疑なし

議事3 ライチョウ野生復帰手法の検討について

- 提案された4つのシナリオ（1：卵による野生復帰、2：ヒナによる野生復帰、3：成鳥・亜成鳥による野生復帰、4：家族による野生復帰）のうち、JAZAとしては、卵による野生復帰（シナリオ1）が最も容易である。卵の交換は域外での遺伝的多様性確保のためにも望ましい。ヒナによる野生復帰（シナリオ2）については、孵化直後のヒナを生息域外から生息域内へ移送することは難しい。家族による野生復帰（シナリオ4）については、受け入れ可能な園館があるかが大きな課題であるが、手を挙げていただいた園館があったことは特筆すべきことである。園館の負担が大きくなることが予想されるので、行政による支援も検討してほしい。
- 5年後の目標を何羽にするかについては、現地調査によって環境収容力や持続可能性を評価する必要がある。野生個体の感染症検査は技術的には可能であるし、実施すべきである。

以 上